

〔翻 訳〕

On the Sino-Japanese Book Trade in Qing Dynasty 清代中日書籍貿易について

著者 吳建華 (広東商学院旅游学院教授)
胡孝徳 (浙江财经学院工商管理学院教授)
訳者 鄧 紅 (本学教授)

内容提要

小論は比較研究の方法を駆使し、清代(主に1644年から1840年まで、以下同じ)の日本に輸入した漢籍¹の経路、数量、値段および利益等の方面に分けて、その時代の中日書籍貿易の基本状況を考察した。清代において、さまざまな理由により、日本に輸入した漢籍は伝統上の文化交流以外に、商品としての特徴が露出して来たと見られる。特に書籍の値段は原産地の中国と販売地の日本と比べて、差額がきわめて大きく、商人たちはその貿易から多額の利益を得ていたので、日本に輸入する漢籍の数と種類は以前の時代より多かったことが明らかになった。しかも、漢籍が日本に入る経路も以前の僧侶携帯ルートから商人運輸ルートに変わったのである。

キーワード

書籍 漢籍 貿易 利益

はじめに

日本に輸入して来た漢籍について、多くの学者、特に中日両国の学者は、文化交流の角度から幾つかの研究を行ってきた。たとえば、日本学者大庭脩は、漢籍の日本輸入の研究が以下の方面で把握すべく、1、輸入の経路；2、輸入の方法；3、如何なる書籍を輸入したか；4、伝来した漢籍の書誌学上の意義；5、日本古典作品の中で引用した漢籍、或いは古典と類似の処から、日本古典作品が参照した漢籍を推論し、その上でどんな漢籍が伝来したかを確認する、と述べた²。

しかし、清代については、文化上の意義で書籍の日本輸入を見るだけでは物足りない点

¹ この文章を翻訳する際、「漢籍」と「書籍」という言葉を使い分ける。普通の「書籍」に対して、「漢籍」とは、日本に輸入してきた中国の書籍を指す。訳者注。

² 大庭脩著、戚印平、王勇、王宝平訳『江戸時代中国典籍流播日本之研究』、第4-5頁、杭州大学出版社1998年。

があると考えられる。なぜなら、もし経済学の角度からこの時期日本の漢籍輸入の状況を考察すれば、漢籍は伝統上の文化担体機能の外に、商品としての機能も突出し始め、それに伴い、来日漢籍の数、種類、漢籍貿易の値段、利益および運輸ルートも変わってきたと見られたからである。

小論はまず書籍の日本伝入の歴史を回顧した上で、清代の来日漢籍を商品としてその数量、値段と利益などを分析して、清代中日書籍貿易の基本状況と特徴を明らかにしたい。

一、漢籍の日本伝来の歴史

漢籍が最初に日本に入ったのは紀元三世紀と見られる。『古事記』に、「天皇命令百济国説：‘如有賢人、則貢上。’ 按照命令貢上来的人、名叫和迺吉師、随同这个人一起貢上『论语』十卷、『千字文』一卷、共十一卷。和迺吉師是文首等的祖先。(天皇は百济国に、「もし賢人がいるならば献上せよ」と仰せになった。そこで、その仰せを受けて献上した人の名は、和邇吉師である。『論語』十卷、『千字文』一卷を、この人に持たせて献上した。和邇吉師は文首等の祖先である)」³とある。『古事記』より八年遅れてできた『日本書記』⁴に、「百济博士王仁」とある。この二人は同じ人であったろう。ただ、『古事記』のこの部分は『千字文』を言及したのは大間違いで、『千字文』はその二百年後に編撰された書物だったからである。しかし漢籍は日本に入ったのは三世紀と見られるのが疑わない⁵。

隋唐時期では、遣隋使、遣唐使たちは中国から帰るとき、みな大量の漢籍を持ち帰り、勉強に来た日本人留学生と学問僧も帰国のとき、多くの漢籍を持ち帰った。吉備真備は『唐礼』130卷、『太衍曆経』1卷、『太衍曆立成』12卷、『楽声要録』10卷を持ち帰った。⁶ 「入唐八家」といわれる人物たちが持ち帰った書籍はさらに多く、華嚴、律、天台、真言諸宗の日本での興起に礎を築いた。その中で注目すべき点は、大量の非宗教的漢籍⁷、たとえば詩文集および書法方面の書類も持ち帰られたことである。以上のことで、日本での漢籍收藏は可能になり、平安初期では個人蔵書が数千巻に達した記録もあった。⁸

宋代では、中日兩國の間に正式な往来がなかったものの、入宋僧と宋朝の来日僧が多かった。統計によると、北宋時に入宋僧は入唐僧より少なく、20人前後しかなかったが、

³ 鄧有恒、呂元明訳『古事記』、巻中、「应神天皇」条、人民文学出版社1979年。訳者注：原文が引用したのは中国語訳の『古事記』であったので、翻訳のときは原文を簡体字のままにした。

⁴ 『日本書記』、日本東京堂刊、岸本宗道校本、明治二十五年。

⁵ 日本学者大庭脩はこの記録は伝説に過ぎなく、歴史事実ではないと述べている。大庭脩著、戚印平、王勇、王宝平訳『江戸時代中国典籍流播日本之研究』、4頁、杭州大学出版社1998年。

⁶ 木宮泰彦著、胡錫年訳『日中文化交流史』、第188頁、商务印書館1980年。

⁷ 木宮泰彦書、第191-192頁。

⁸ 『日本后記』、延历十八年二月己未条。木宮泰彦書、第197頁。

南宋の時に入宋僧は100人以上に登り⁹、大量の宗教典籍以外、多くの儒書、詩文集および医書も持ち帰られたと見られる。北宋の時、著名な日僧奝然は帰国の際、宋本『大藏經』と宋太宗に賜われた新譯經286巻を持ち帰った。『泉涌寺不可棄法師伝』によると、南宋の時僧侶俊菴は中国から帰国の際、仏教經典1,200余巻以外に、朱熹『四書集注』の初刊本を含むほか漢籍を719巻持ち帰った¹⁰。これは前例のないことで、以前は非宗教漢籍を数十巻持ち帰ったことがあったが、百巻以上を持ち帰ったことがなかったからである。そのとき、『太平御覽』のような北宋政府から外国に輸出厳禁されていた書籍も、さまざまなパイプで日本に入り、南宋の時、この書物が日本には数十部あったといわれる¹¹。

元の時代では、中日間の交流は元の世祖が起こした二回の日本襲来によっても中断されたことなく、頻繁に行なっていた。入元僧人と元の来日僧人は日本に大量の経巻を持ち帰っただけでなく、詩文集、儒、道いわゆる諸子百家の書及びその他の雑書類も持ち帰った。漢籍輸入の量を明白に考察できる資料があまりなかったが、経巻が大量に持ち運ばれ、元朝の雕刻工匠は多く来日し、日本の印刷出版業の興起と経書の印刷に大変貢献したと見られる。

明代の中日関係は前より複雑であって、倭寇問題によりこの時期両国間の交流が中断された時期もある。しかし、兩國の民間交流は絶えることがなかった。統計によると、この時期に入明した僧侶は110人に登り、その中で「永樂勘合貿易条約」が締結する前に商船に乗り中国に来た求法僧もいれば、日本方面の使命を持って中国に入る僧侶もいた¹²。彼らは大量の詩文集、儒書、史書等を持ち帰ったと見られる。

二、清代輸日漢籍の数量についての分析

前述の如く清代以前に日本に伝来した漢籍は、ほとんど中国僧侶あるいは日本僧侶が携えて運んできたものばかりと見られる。留学生が帰国の際に持ち帰ったものもあるが、それらは彼ら自身が中国で探して購入し、然る後に中国の日本行き船或いは日本の帰国船に乗って携えて帰るものであった。清代の違うところは、中国に行く日本人はほとんどなく、来日の清朝僧侶は60人以上に登り¹³、元、明朝より多かったが、持って来た漢籍が却って少なかった、ということである。つまり、漢籍が大量に日本伝来する主要ルートは僧人の携帯ではなく、日本に赴く商船によって特殊な商品として日本に輸入するルートに変わったのである。漢籍に対する伝統的な興味に加え、幕府および社会各階層は漢籍の使

⁹ 木宮泰彦書、第254、305頁。

¹⁰ 嚴紹璣『中国古代文獻典籍東伝日本の軌迹』。陸堅、王勇主編『中国典籍在日本の流伝与影响』、第20頁、杭州大学出版社1990年。

¹¹ 『江戸時代中国典籍流播日本之研究』、第11-12頁。森克己著『新訂日宋貿易研究』、『續日宋貿易研究』、『續續日宋貿易研究』も参照。『森克己著作選集』(第1-3巻)、国書刊行會昭和五十年。

¹² 木宮泰彦書、第587、606頁。

¹³ 木宮泰彦書、第683頁。

用と收藏は広く渡り、漢籍に対する需用は以前より多くなってきたと考えられる。

以下、輸日漢籍の数量と輸日漢籍の値段と二つの方面から、商品としての漢籍の輸入状況を考察したい。

下記は中国商船が日本に運んで来た漢籍の数量の一覧表である。これらの漢籍は明確な値段があったが、ただそれらの名称と値段と一々挙げる事がまだできない。

表一：中国商船輸日書籍数量表

商船名称	往返日本の年代	輸入漢籍数	商船名称	往返日本の年代	輸入漢籍数
以字号	1693-1786	109	世字号	1693-1803	366
波字号	1693-1799	160	邊字号	1694-1801	52
甫字号	1693-1798	80	登字号	1694-1803	152
加字号	1693-1803	263	智字号	1694-1803	150
多字号	1693-1803	176	古字号	1694-1803	315
不字号	1693-1803	137	江字号	1694-1798	101
几字号	1693-1803	247	天字号	1694-1802	145
忠字号	1693-1803	849	安字号	1694-1799	18
佐字号	1694-1803	65	良字号	1694-1803	14
女字号	1694-1798	27	久字号	1694-1803	210
美字号	1694-1798	49	也字号	1694-1800	38
比字号	1694-1797	34	計字号	1694-1803	151
毛字号	1694-1783	9	濃字号	1695-	7
須字号	1694-1795	36	満字号	1695-1801	15
留字号	1695-1800	13	津字号	1698-1798	22
奈字号	1695-1799	35	仁字号	1699-1803	14
利字号	1694-1803	192	福字号	1701-1793	10
遠字号	1694-1798	18	武字号	1711-1793	3
和字号	1694-1803	100	宇字号	1707-1803	25
与字号	1694-1798	38	由字号	1706-1799	10
礼字号	1694-1798	83	呂字号	1694-1786	21
曾字号	1694-1803	192			

向井富編纂『商船舶来書目』（五冊）による。（文化元年（1804年）編、日本国立国会図書館所蔵）巖紹盪著『中国古代文献典籍東傳日本的軌迹』から引用。（陸堅、王勇主編『中国典籍在日本的流傳与影响』第32頁、杭州大学出版社1990年）

1826年（文政九年）正月、清朝人朱柳橋の商船「得泰号」は遠江国下吉田村（今の静岡県榛原郡吉田町）に漂流した時、日本人野田笛浦が朱柳橋との筆談で次のように書いた、「貴邦載籍之多、使用有望洋之嘆。是以余可読者讀之、不可読者不敢讀、故不免夏虫之見者多矣。（貴国から来た漢籍がとても多く、使用するのに望洋の嘆があるほどです。それで私は読めるものだけを読み、読めないものはあえて読まないことにしていますので、夏になると（書籍に）たくさんの虫が出て来ました。」と。これに対して、朱柳橋は次のように答えた、「我邦典籍雖富、邇事（年）以来装至長崎、已十之七八、貴邦人以国字譯之、不患不能尽通也。（わが国の書籍は多いけれど、長年以來すでに十分の七か、八が長崎に運ばれてきています。もし貴国の人々はそれらを日本語に訳すれば、尽くせないという心配は要りませんよ！」¹⁴と。「十之七八」とは過大な言い方であったが、しかし、中国商船が日本に運んで来た漢籍の量は非常に多いことが疑われない事実であろう。大庭脩が行なった1714－1855年間（正徳四年－安政二年）の統計によると、中国商船は漢籍6,630種、56,844部を運んできたが、全部ではない、¹⁵というのである。

清代輸日漢籍の数が大量になった理由について、まず考えられるのは幕府方面の巨大な収蔵量であった。役所筋の漢籍は主に幕府所属の紅葉山文庫（「楓山文庫」）に収蔵されていた。1639年（寛永十六年）、文庫は江戸城内の紅葉山に設けられた文庫であったが、「御文庫」、「官庫」とも呼ばれ、「紅葉山文庫」とは明治以後の俗称であった。設立当時、文庫の漢籍を増すため長崎で地元の儒学者向井元昇を「書物改」に任命して、中国の船が運んできた漢籍を選ばせる専門職であった。文庫の蔵書は1643－1646年（寛永二十年－正保三年）年間では850部増え、1651－1653年間（庆安四年－承広二年）では707部増え、以後毎年増加していく。1819年（文政二年）にはすでに75,000冊に達し、明治初年は約10万冊、その中73,000冊は漢籍であり、しかもほとんど中国の原版書籍という¹⁶。

幕府紅葉山文庫の蔵書が急遽増える時期は二回あった。一回目は享保年間（1712－1736年）、將軍徳川吉宗はさまざまな種類の図書の収集に熱心であった時、二回目は寛政から文化年間（1789－1818年）の時、中心人物は林衡（述齋）であった。1716年（正徳六年）徳川吉宗は將軍になった後、各種の知識を学び、將軍としての教養を向上するため、一段と文庫を重視するようになった。対外政策においても、一定の改正を行なった。つまり、

¹⁴ 『得泰船筆語』、『関西大學東西學術研究所紀要』（第13輯）、第78頁下、関西大學東西學術研究所編、1980年。

¹⁵ 大庭脩著、戚印平、王勇、王宝平訳『江戸時代中国典籍流播日本之研究』、第50-51頁「表二持渡書数量表」、杭州大学出版社1998年。

¹⁶ 大庭脩著、魏丽莎訳『江戸幕府紅葉山文庫漢籍的搜集』。王勇主編『中日漢籍交流史論』、第28頁、杭州大学出版社1992年。

1720年（享保五年）後、それまでの禁書政策を改め、天文、暦法などに関する書籍が輸入できるようになった。また中国商船に『大清会典』等法律に関する中国の方志類の漢籍を運んでくるよう命じた。1725-1731（享保十年-享保十六年）の間、中国商船が漢籍264部、1732-1734年間（享保十七年-享保十九年）では108部を運んできた。紅葉山文庫所蔵の漢籍に医書が323部あり、その三分の二は寛永至宝永年間に収集されたもので、残りの三分の一は吉宗の時代に収集されたものと見られる。兵書は101部あり、ほとんど元和から元禄初年の時に取めたものである。逆に、俗文学、小説、宗教方面の漢籍は収集されなかった。

また、当時漢籍を使用し收藏する各階層の人も増えてきた。幕府の紅葉山文庫以外に、いくつかの藩主も大量に漢籍を収集するようになった。周知の通り、加賀藩主前田綱紀は学術を好み、明朝律書の収集に力を入れ、たとえば『大明律読法』、『大明律管見』、『大明律全解』、『大明律詳注分解大全』、『読律瑣言』、『読律辨疑』、『読律私箋』、『職源』等について、綱紀がほしいのは原版書だけで、引用内容のある漢籍を不要とした。「明朝之書已集数十部、然尚无原本、集之甚難。」¹⁷と言われるほどであった。当時、最も有名な個人蔵書家は豊後（大分県）佐伯藩藩主出雲守毛利高標であり、彼が收藏した宋元版および朝鮮版の珍本は20,000冊以上¹⁸に登る。その他の著名な蔵書家に因幡（鳥取県）鳥取支藩の池田定常、近江（滋賀県）仁正寺藩主市橋長昭、大阪学者兼商人木村孔恭など¹⁹が取り上げられる。

三、輸日漢籍的値段与利益

漢籍の中国本国における値段について、参考できる史料はあまりなかったが、関連する資料から、ある程度の推測ができると思われる。もちろん、漢籍は転々とした過程において、その値段はかなり変化するが、相互比較できないことはないと考える。

まず清代の書籍刊行の事情について概ね考察してみよう。清代の刻書は順治の時から始まり、康熙の時に盛になり、乾隆の時代にピークに達した。康熙十二年（1673年）、清朝政府は武英殿刻書処を作り、閣僚に管理させた。その後、揚州では揚州詩局が設立された。この二ヶ所は内府刻本を作る処であった。刻書の場所は書坊と言ひ、役所筋の官弁と民間の兩種あり、官弁では内府刻本、武英殿刻本と官書局刻本に分けられる。民間では家刻と坊刻兩種に分けられる。官弁のうち、武英殿御書処は最も有名であった。民間の方では各省の書坊が数えきれないほどであった。北方地方では、北京を中心に、清代の中期までにピークに達した。南方では、南京、杭州を中心とするが、蘇州、揚州も重要な出版地で、四川、広東、江西等省にも書坊が少なくなかった。蘇州では当時書籍を販売する書舖

¹⁷ 大庭脩著『江戸時代の日中秘話』、徐世虹訳、中華書局書局1997年版、第74、78頁。

¹⁸ 巖紹墨著『漢籍在日本的流布研究』を参照、第233頁、江蘇古籍出版社1992年。

¹⁹ 彭斐章主編『中外圖書交流史』を参照、第179-181頁、湖南教育出版社1998年。

が二十軒以上あった²⁰故に、清代前期の蘇州書舗は当時の北京の琉璃廠に負けないほどといわれる²¹。清代書坊刻書の内容は大部分私塾用の四書五経と后蒙書籍であって、ほかには医、卜、星相、仏経、農書、類書、小説等もあるが、このような刻本は蔵書家と士大夫に重視されず、ほとんど民間に販売されるという²²。

清代では、「書估」と呼ばれる書籍商人がいた。彼らは古籍売買に従事するブローカーで、みな落ち零れる文人であった。いわゆる「乾嘉學術」が盛んになった時期に、このような書商の行動はとても活発で、店を出さずに、学者と蔵書家に古籍を集めて、手数料を稼ぐために奔走していた²³。

清代前期の凶書の販売網は前代より更に普及され、あらゆる町にも書籍を発売する店舗あるいは露天商がいた。それらの店の大多数は大都会或いは州府県の学校の附近、及び知識人が集まるところで展開していた。経営規模と経営方法により、出版兼発行、発行専門、店舗販売、書估、書船等に分けられる。書籍を販売する書坊書店は最も多く、その中で古籍売買する店が最も繁盛していた²⁴。以上のことで、来日商人の書籍購買に大変便利であった。

また、北宋の畢昇が泥活字印刷術を發明してから、元と明の時代に広く応用されてきた。木活字は経済的かつ便利であるが故に、清代ではかなり流行っていた。それ以外に、還有銅活字、泥活字、磁活字などの印刷も盛んであった。

乾隆三十八（1773年）年十月二十八日、戸部右侍郎、総管内務府大臣、武英殿御書処宸苑を管理する金簡は、活字書版のことで、次のように上奏した、「即如史記一部、計版二千六百七十五塊、按梨木小板例、価銀每塊一錢、共銀二百六十七兩五錢。計写刻字一百一十八萬九千零、每写刻百字工価銀一錢、共用銀一千一百八十九兩。是此書僅一部已費工料銀一千四百五十兩。今刻棗木活字套版一份、通計亦不過用銀一千四百兩、而各種書籍皆可資用。即或刷印經久、字画模糊又需另刻一份、所用工亦不過此數。」²⁵この奏疏文の内容は、『史記』のような大きな書籍を刊刻する費用（材料費、刻印工の給料等を含む）は銀1,450兩で、棗木刊刻にすれば、費用は1,400兩になるが、棗木字は多次使用が可能であり、しかもほとんど永久に使えるので、大いにコストが削減できる、ということである。

それに対して、清高宗の詔は曰く、「(内府刻書) 策種類多、則付雕匪易、董武英殿事金簡以活字版為請、既不浪費棗梨又不久淹歲月、用力省而成功速、至簡且捷、埤泥体粗、熔鉛質軟、俱不及鋟木之工致、滋刻单字二十五万余、雖百十種、悉可取給。策活字之名不馴

²⁰ 黄丕烈著、潘祖荫編集、周少川点校『士礼居藏書題跋記』、書目文獻出版社1989年。

²¹ 叶德輝『書林清話』の『吳門書坊之盛衰』。

²² 盧賢中著『古代刻書与古籍版本』、第99頁、安徽大学出版社1995年。

²³ 黄丕烈『士礼居藏書題跋記』、第33、45、72、125頁。この本では、黄丕烈の多くの藏書はこの人たちから入手した記録が随所ある。

²⁴ 吉少甫主編『中国出版簡史』、第203頁、学林出版社1991年。

²⁵ 『武英殿聚珍版程式』美術叢書、第154-155頁。

雅、因以聚珍名之。」²⁶といい、それで「武英殿聚珍版」の名を得たのである。乾隆帝はまた江寧（南京）、浙江、福建東南各省にこのように刊行して広げようと命ずる詔書を出したことがある。乾隆三十九（1774年）年五月、大小棗木字を二十五万三千五百個刻み、使った銀は一千七百四十九兩一錢五分で、備用の棗木字、擺字楠木槽板、夾条、檢字婦類用松木盤、套板格子、字柜、板箱、板凳等を含めて、全部で銀を二千三百三十九兩七錢五分使ったという²⁷。

木字本には売値をつけないとみられる。乾隆五十八年（1793年）、周秉鑑の易安書屋は友人から送られた六千以上の活字を使って、『甫里逸詩』を刊行した。本の後ろに、「印一百部、五十分送四方、五十待售、紋銀貳錢。」とあり、ほぼ半値で売るのであった²⁸。木活字印刷工の給料については記録が残っていないものの、武英殿の銅字を編集する人については、「毎月每人人工食銀三兩五錢」、「刷印連四紙書一千篇、工価銀一錢六分、竹紙書一千、工価銀一錢二分」²⁹という記録が残っている。

「武英殿造弁処写刻書籍、刷印工価并顔料紙張定例」の中で、次のような工賃が表示されていた、「写書内宋字每千字工銀二錢、歐字每千字工銀四錢、軟字每千字工銀三錢、写図内小字不拘宋軟字每千字工銀三錢。刻図并假門牆壁面稀疏処臨時酌定工価、每工銀一錢五分四厘。棗木加倍。填万字錦邊寬一寸、長三尺二寸合一工、从三月初一日起至八月三十日止、每工一錢五分四厘；九月初一日起至二月三十日止、每工一錢三分三厘。」³⁰と。

上述の資料は書籍を刊行印刷のコストの値段のみであった。もし中国での書籍の販売値段を知っていれば、問題の解決につながると見られる。関連する資料を整理し、以下の表のデータが得られた。

表二：書籍の買い集め値段一覧表

書籍名称	買い集め価	資料来源 ³¹
周礼二卷	10金	『士礼居藏書題跋記』（以下簡稱“士書”）p.1、
礼記卷第五『月令』一册	索值十餅	p.4
公羊解詁十二卷	白金120兩	p.4
讀四書叢說五卷	緡錢二千	p.7
博雅十卷	白金50星	『黄丕烈書目題跋』（以下「黄書」と略称）p.20、

²⁶ 陶湘『陶輯書目』、清代殿版書目。

²⁷ 『張秀民印刷史論文集』、第216頁、印刷工業出版社1988年。

²⁸ 『張秀民印刷史論文集』、第222頁、印刷工業出版社1988年。

²⁹ 『欽定大清會典事例』、第1199卷、「庫作匠役」。

³⁰ 陶湘『清代殿版書始末』。

³¹ 『士礼居藏書題跋記』、[清]黄丕烈著、潘祖荫編集、周少川点校、書目文獻出版社1989年。『黄丕烈書目題跋 顧広圻書目題跋』、中華書局1993年影印。

広韵五卷	白鏹三千金	黄書p.22
続中興編年資治通鑑十五卷	易番餅10枚	土書p.17
編年通載四卷	白金40兩	土書p.18
孫氏祖庭広記十二卷	贈原主人30金	土書p.28
紹興十八年同年小録不分卷	青錢1500文	土書p.29
元統元年進士題名録不分卷	錢140文	土書p.33
草莽私乘一卷	値2錢	土書p.34
陸游南唐書十八卷	番錢1枚	土書p.38
輿地広記三十八卷	京師から購入、120金	土書p.42
天下郡国利病書三十四册	数十金	土書p.43
嚴州図経	錢百千文	土書p.47
齊乘六卷釋音一卷	千余錢	土書p.50
長安志二十卷	30餅	土書p.53
幽蘭居士東京夢華録十卷	白金24兩	土書p.59
五代会要三十卷	番餅14枚	土書p.62
新雕重校戦国策三十三卷	白鏹80金	黄書p.31
国朝名臣事略十五卷	銀60餅	黄書p.38
新序十卷（北宋本）、列子	白鏹80金	土書p.70
新序十卷（校宋本）	番餅42枚	土書p.73
説苑二十卷	30金	土書p.75
管子二十四卷	120金	土書p.83
棠因比事一卷	番餅14枚	土書p.85
孫真人千金方三十卷	2兩4錢	土p.86
不得已二卷	白金一錠	土書p.97
易林十六卷	白金3兩	土書p.99
咸淳臨安志九十三卷	二十千錢	黄書p.49
洛陽伽藍記五卷	銀3星	黄書p.52
職官分記五十卷	番餅30金	黄書p.58-59
金石録三十卷	値10番	黄書p.62
緯略十二卷	値12番	土書p.129
愧郊録十五卷	白金一斤	土書p.142
太平御覽三百六十卷	250金（含中介費10金）	土書p.146
韓非子二十卷	30白金	黄書p.71

説明：「番餅」とは当時の人が中国に流入した外国の銀元の俗称。「白鏹」とは「白銀」の別称。一般的に1錢=1/10（市）兩=10（市）分=5克（『辞海』縮印本、第346頁中、上海辞書出版社1980年。）

上記の表は清代著名蔵書家黄丕烈が多年にわたり購入した書籍の一部分の値段である。この値段と商人たちが書籍を購入し日本に持ち込み販売する漢籍の値段とは雲泥の差があった。なぜなら黄氏が購入した書籍は、その大多数が宋元本で、明本も少なく、清朝の刊行本には興味がなかった。前述のように、蔵書家たちは私塾用の四書五経と启蒙読物、及び医、卜、星相、仏経、農書、類書、小説等刻本にはあまり重要視されなかった。書籍の版本、刊刻年代の違いによって、値段は全然違うが、来日貿易商人は書坊から清朝刊刻の書籍を日本に運んでくるものがほとんどであった。しかし、上記の表から書籍値段の一般傾向が見られる。黄丕烈（1763-1825）が生活する乾嘉時期の一般物価を考えると、普通書籍の値段は黄氏が購入する書籍の幾十分の一ないし百分の一と考えられる。湖州人陶士秀は番銭四枚で宋刻『司馬温公集』を購入し、黄氏には60金で売った。しかし陶氏の三つの部屋にある書籍は、青蚨24兩³²しか売れなかった。上表にある『巖州図経』は昆山の書肆では青蚨三兩二銭で売っていたが、黄氏の書友が黄氏に売ろうとした時、百千文の高位に釣られたという³³。

一方、日本方面では漢籍の日本での値段について多くの記録が残っている。漢籍は日本に到着の後、数多くない品物は日本の市場では「入札」のような競売に掛けられた。たとえば、1843年（清道光二十三年、日本天保十四年）10月6日至10月8日、127種の漢籍は数家の買主に競売され、競争が激しかったという。³⁴

上記の漢籍は、もし売れ筋のものであれば、競売の値段は倍以上跳ね上がり、漢籍、特に人気のある漢籍は日本では広い需求市場があると思われる。

底値と競売値の巨大な差額から、漢籍は日本では莫大な利益をもたらせると考えられる³⁵。しかも、来日商人が購入するときの時値段は遥かに底値より高いことを考えると、商人たちの利益は中国から日本に輸入するその他の商品より遥かに高かったろう。江戸鞠町十町目に位置し正徳から天明年間存在する唐本屋（また「御書物所」ともいう）の例をみよう。主人の田中清兵衛はかつて幕府、水戸藩、甲州藩、加賀藩のために漢籍を買い集めたことがある。元禄七年七月、黄金10兩の値段で『書経衍義』買い集めた。またほかの2函8冊の漢籍は金18兩を使ったという。³⁶

漢籍値段の高さは、漢籍の貴重さ、日本市場需求の大きさを語り、普通の値段では買い集められなくなったことを示している。それで漢籍は商品として、来日貿易商人が日本市場上で獲得した利益は、すでに絹糸およびほかの商品と同じ、超えるものも少なくないことが明らかになった。

³² 黄丕烈著『士礼居蔵書題跋記』、第47頁。

³³ 黄丕烈著『士礼居蔵書題跋記』、第47頁。

³⁴ 原物は九州大学九州文化史研究所に所蔵。巖紹溍『中国古代文献典籍東伝日本の軌迹』による。（陸堅、王勇主編『中国典籍在日本の流伝と影響』、第35頁、杭州大学出版社1990年）

³⁵ 江戸時期の貨幣の換算比率は金1兩=銀50匁=銭4貫文、銀1貫=1000匁、金1兩=4分、銭1貫=1000文。（大久保光編著『日本史料集成』による、第186頁、第一學習社昭和55年第10版修訂）。

³⁶ 大庭脩著『江戸時代の日中秘話』、徐世虹訳、中華書局書局1997年版、第72-73頁。

四、結語

上述の如く、小論は清代においての日本に輸入した漢籍を商品として、その数量、値段及び売り行きを考察し、中日兩國の間に存在していた書籍値段の差額と商人たちが獲得した利益の莫大さを明らかにした。

その時代の日本国内では、漢籍の価値を知り渡り、それを活用し收藏する文化人が増えたとともに、諸藩は幕府のために漢籍を収集し購買するようになった。すなわち、この時期に日本に入った漢籍は前の時代と比べて、新しい価値、つまり珍しい商品としての価値が発見され、一種の需要インフレ現象が起こった。以前のような使節あるいは僧人が往来の時についでに漢籍を携帯して帰るやり方は、もはや間に合わなくなった。それは幕府が日本に来航する商船に一定数量の漢籍を携えてくるよう命令を下したゆえんであった。一方、日本に来航する商人たちは日本市場の漢籍貿易に莫大な利益があることを注目し、積極的に商業活動を行なうようになった。

したがって、清代の日中間の漢籍貿易は以前の時代と比べて次のような特徴が見られる。

まず、清代において、書籍は本国の中国では印刷から卸売りまでのすべての階段において商品経済の特徴が露出してきた。書籍は輸出物品として、貿易商たちが日本運んで行くほかの商品と同様に、すべて明確な値段がついて市場で調達できるようになった。

一方では、漢籍は商品として日本に運ばれて来た数が大量で、しかも一部分新しく出版されたものも迅速的に日本に輸入してきた。日本ではいわゆる漢籍の需要インフレ現象が起こり、来日の漢籍はかなり高価な値段がついていた。

それで漢籍が一種の特殊な商品として、清代中日貿易にける重要な商品の一つとなり、商人たちは漢籍の貿易から巨額な利益が得られた。その利益はほかの商品、たとえば絹糸、茶、薬材よりも少なくなかったと見られる。

なお、清代中日書籍貿易の過程において、中国に運ばれた日本書籍も少なくないと見られる。その数と値段についての研究は、紙面の関係でできなかったが、今後の課題にしたいと考える。